

# 静岡市郊外の棚田でお米を作って 23 年

天岸祥光

## (1) 大自然相手の米作りは簡単ではなかった！

この棚田の米作りが市民の力で立ち上がった経緯は、かいつまんでいえば、二十世紀最後の3年間に亘って開催された、静岡大学開学五十周年記念公開講座「新世紀に向けてー二十世紀とは何だったのかー」の中の、米作りの研究者静岡農学部教授中井弘和氏と奈良で米作りをしている川口由一氏との対談・講演「地球は世界人口を支えられるかー二十一世紀の食料・農業を考えるー」が発端でした。「耕さず、農薬、肥料は使わず、草や虫を敵としない」という「自然農」を提唱する川口氏の講演を聴いて感動した市民が、静岡でもお二人の主張する米作りを行いたいと言ったのがきっかけでした。その中に私達夫婦も入っていました。その結果、2000年(平成12年)に結成されたのが「清沢塾」という、

一般市民30数名+地元有志数名からなる組織でした。場所はうまい具合に国道362号線バス終点の久能尾(きゅうのう)手前の相俣にあるきよさわ里の駅から南に1.2キロほど入った山間に見つけることができました。そこは米作の棚田が放棄されて3,4年経っていた所で、そこを借り受けて棚田を再生するところから始めました。

我々の手本とすべき川口さんの提唱する自然農は、とにかく耕さないことを基本としています。無農薬、無肥料は無論ですが、動物の糞などを堆肥とし、微生物に分解してもらう有機農法とももちろん違います。

それではこれこそが自然農法なのかと言うと、専門的にはやや難しい話になります。つまり「自然農法」という方法は、最近の広辞苑でも定義されているように、自然環境に



Google Earth で見た最近の棚田の鳥観図。面積は、2反(20アール)ほどありますが、実行人員の関係や、周りの杉、檜の成長で日陰になってしまっていて使えないところもあるので、実際の有効面積は1.3反くらいです。



初年度の田んぼを覆う雑草。これはSBS撮影の動画からコピーしたのでややぼやけていますが、見事に雑草が一面を覆いつくしている様子が伺われます。

沿った、耕さないことを基本とした、無農薬、無肥料の農業技術のことを指しています。耕さないという考えは、ここでも最も重要なことで、耕すことによって地中の環境は激変し、生物多様性や土の健康は失われ、土が硬くなるというのが主な理由です。そして草刈り機以外の機械は使わないため最も持続可能な農業のやり方ということになります。

しかし、高温多湿の日本では雑草がすぐに生い茂り、除草剤なしの不耕起はいたって難しいのです。地図の上で静岡県を通る北緯35度の線を西の方に辿っていくと、何と北アフリカのチェニジア辺りを通っていることが分かります。日本は紛れもなく亜熱帯の国です。雑草が生い茂るのは当然です。それよりずっと北に位置する欧米での農業には「雑草」という敵は存在しないのかも知れない、と思ってしまう（注）。

ですから上記の川口農法や自然農法の最大の問題は、いかに耕さずに、農薬をまかずに雑草を取り除くかが課題で、自然農法では様々な方法が採られています。川口農法では雑草対策として「作物が小さいころは草に負けなように手を貸す。つまり作物の近辺の草は抜いてそこに寝かせておく」という作業を基本としていて、根はそのままにして稲の栄養物になり、土を柔らかくする作用がある、と言うのです。これは従来の農業技術としての「自然農法」とは異なり、より人間と自然が一体となった、人間の生き方を考えながらの農法で農業技術論ではないということで、これを改めて「自然農」と呼び、「自然農法」と区別しようというのです。

しかし、この川口農法は俄かには信じ難いところがあります。奈良県にある川口農場を見学した我々の有志は（私は行けませんでし

たが）、そうやって実際に見事に育った稲と柔らかい土を見て、なるほど、とすっかり感心して帰ってきました。これで川口農法の導入は決まりです。

もちろん私も何の疑いもなくこれに従いました。なにしろ耕さなくていい、雑草は基本的に抜かなくていい、と言うのですからこんな楽な農業はないだろうと思ったのが、農業を全く知らない私の浅はかさでしたが。

いよいよ2000年春に棚田を始めて見て、雑草もさることながら、ひとつひとつの田んぼの畔づくりや石垣を組んだり、水漏れ（サマガニが遠慮なく穴をあけてくれます）を塞いだり、棚田への水は横を流れる沢の上流300mの所からパイプで引いてこなければならぬし、イノシシは出るし（実際その後、せっかく作った稲穂を全部食べられてしまったことが二度もありました）、豪雨や台風で土石流が流れ込んでパイプや棚田がめちゃくちゃに破壊されてしまったことも一度や二度ではありませんでした。

そんな散々痛めつけられてきた我々も、20年も経つと、さすがにこの自然の猛威と手を組んでいく方法を遅ればせながら何とか編み出し、今では相当自然と仲良くやっているつもりになっています（しっぺ返しがあるかもしれませんが）。と同時に「川口農法」という言葉も出なくなりました。基本は川口農法でしようが、清沢の自然環境の中で我々が見つけた独自の農法を試行したり、場合によっては雑草を根ごと抜いたり、やむを得ず耕運機を入れて耕す場合もあります。

こういった試行錯誤をしながらも前進していく中で、やはり雑草の猛威は初めに実感した大自然の驚異でした。しかし2年、3年と経験していくうちに、この雑草にもリズムというか秩序の様な流れを感じ始め、目くじらを立てる対象から、私には観察する価値のある対象物になってきました。そういうわけで、次回のその（2）では、「田んぼの雑草の多様性」について述べてみたいと思います。

（注）ミュージアム館長佐藤洋一郎先生から、和辻哲郎著「風土」に、「ヨーロッパには雑草はない」と書いてあることを教わりました。岩波文庫「風土」P.103に確かにそう書いてありました。